

書評

マリー・ダナヒー、マギー・ニコル、ケイト・デヴィッドソン(編)
菊池安希子(監訳)
網本 和, 大嶋伸雄(訳者代表)

臨床が変わる！ PT・OTのための認知行動療法入門

評者 仙波浩幸
(豊橋創造大学保健医療学部理学療学科)

認知行動療法は心理職や精神科医による介入から、チームにより展開し提供する新たな段階に突入した。理学療法士や作業療法士は臨床においてそれぞれの専門性を発揮し治療を進めるが、それぞれの専門領域に認知行動療法の理論を取り入れることで治療効果をさらに高め、エビデンスを確立し、それを多職種連携で統合的に展開していくというものである。それは認知行動療法士になるのではなく、各専門職の実践に認知行動療法の理論を理解し治療実践に積極的に活かしてくださいという提言である。

これは精神心理領域における、理学療法士と作業療法士の治療参加への期待が大きくなり、患者中心の医療を実現するためには理学療法と作業療法とのコラボレーションが不可欠というメッセージであると受け止めた。治療において身体障害、精神障害、社会的側面、患者本人の主体的参加のいずれかが欠けても最良の結果を残すことができない。このメッセージはイギリスで発せられ、すでに6年が経過している。

本書はMarie Donaghy, Maggie Nicol, Kate Davidson “Cognitive-Behavioural Interventions in Physiotherapy and Occupational Therapy”の邦訳である。認知行動療法が新たなパラダイムに突入し、新たな治療の視点や枠組みを提示し、理学療法士と作業療法士を対象に執筆された初めての入門書である。

構成は、Part 1は理論的背景を学び、Part 2は実践に応用するという構成である。うつ病、不安障害、慢性精神疾患、アルコール嗜癖、慢性疼痛、線維筋痛症、

慢性疲労症候群の各論構成で、今なお精神科医療の中心である精神科からクリニックで頻りに遭遇する疾患、それも患者数が増加している疾患まで幅広く網羅され、理論(総論)と各論もバランスよく執筆されている。

訳文がとてもわかりやすく、読み進めてもストレスがまったく感じられず、すらすら読み切ってしまう。訳者の能力の高さと苦心が伺える。精神障害への考え方、評価、対応について、丁寧で内容が濃く最新の知見もふんだんに書かれている。評者個人的には「共感」について、至るところに腑に落ちる記述がある。

理学療法士にとっても、精神心理領域の重要性が少しずつではあるが浸透し始めている。日本理学療法士学会に精神心理領域理学療法部門が立ち上がり、2014年4月現在1,500名弱の日本理学療法士会員が登録している。

本書は、精神心理面の評価・アプローチを医療機関勤務のみならず、地域在宅で活躍する理学療法士や作業療法士も理解・実践できるようになるための最適な入門書である。

理学療法士や作業療法士にとって、座右の書の一つになるべき書籍である。

● B5判, 208頁, 2色刷
定価: 本体 4,200円+税
医学書院刊, 2014年

